

自閉症スペクトラム障害児のセルフ・モニタリングの 行動調整機能に関する研究

(中間報告)

立教大学心理教育相談所 太田 研

The behavior-regulating function of self-monitoring by children with the autism spectrum disorders

Center for Educational Testing and Psychological Consulting, Rikkyo University OTA, Ken

要 約

本研究では、自閉症スペクトラム障害児による行動の自己管理を高めるための介入技術の開発を目的とした。とくに、本研究では、自己管理を構成する要素であり、自己管理に最初に必要なセルフ・モニタリングを言語行動として捉え、指導終了後もセルフ・モニタリングが般化するための介入技術の検討を行った。自閉症スペクトラム障害のある児童を対象に、セルフ・モニタリング行動を、複数範例による指導、自然な強化随伴性、弁別不能な随伴性によって指導し、参加者間多層ベースラインデザインによって指導の効果を評価する。本稿では、自閉症スペクトラム障害児の行動変容を目的に、セルフ・モニタリングを介入技術として扱った先行研究の概観を行った。そして、本研究の目的、方法、現在の進捗状況と今後の計画について報告する。

【キー・ワード】 自閉症スペクトラム障害児, セルフ・モニタリング, 般化

Abstract

This study aimed to develop an intervention technology to promote self-management by children with autism spectrum disorders. In this study, the target behavior was self-monitoring as verbal behavior. This is an element that constitutes self-management, for which the first stage is self-monitoring. This study examined in particular an intervention technology for maintenance and generalization, even though the intervention was removed. Participants were children with autism spectrum disorders. The intervention strategies included the multiple-exemplar training, natural contingencies of reinforcement, and indiscriminable contingencies. The research design was a multiple baseline design across participants. In this paper, previous studies that used self-monitoring as an intervention technology that promotes the independence of the children with autism spectrum disorders were reviewed, and the purpose of this study, as well as the method, the present progress, and a future plan are reported.

[Key words] autism spectrum disorders, self-monitoring, generalization

問題と目的

自閉症スペクトラム障害児は限定的で反復的な行動様式を主徴としているように、特定の指導場面で獲得した行動が指導終了後に減弱してしまったり（維持の問題）、他の場面で生じなかったり（場面般化の問題）、他の反応クラスに派生しない（反応般化の問題）可能性がある。これは般化の問題（Stokes & Baer, 1977）とされている。般化の問題を解決するための一つの方法として、従来よりセルフ・モニタリングが用いられてきた。セルフ・モニタリングとは自身の行動の生起・非生起を観察・記録することであり、セルフ・モニタリングにより標的行動に望ましい変容が生じることを反応効果（reactivity: Nelson & Hayes, 1981）という。セルフ・モニタリングは自閉症スペクトラム障害児の行動変容プログラムとして科学的根拠が認められており（Odom, Brown, Frey, Karasu, Smith-Canter, & Strain, 2003）、指導者からの指揮監督によらず行動の自己管理を可能にすると考えられている（Hume, Loftin, & Lantz, 2009）。

しかしながら、セルフ・モニタリングによる行動介入を扱った先行研究を概観すると、般化に関する課題が見られる。概観対象となった研究は、①1990年から2010年までに公刊された先行研究のうち、②自閉症スペクトラム障害児者の行動変容を目的に、③セルフ・モニタリングを適用した研究であった。なお、先行研究の検索は、データベース PsycINFO を用いた。その結果、上記①～③の基準を満たした研究は30編であり、そのうち指導後の維持を対象とした研究は14編（47%）、場面般化を扱った研究は10編（33%）、反応般化を扱った研究は2編（7%）であった。以上の先行研究は、セルフ・モニタリング除去後の介入効果の維持や般化を扱っており、セルフ・モニタリングを行動とみなし、セルフ・モニタリング行動の般化を扱っている研究は皆無であった。セルフ・モニタリング手続きを概観すると、参加者が自身の標的行動の生起・非生起を観察し、記録する際に記録装置を用いている。たとえば、記録用紙（e. g., 太田, 2010, 2012）、計数機（e. g., Nelson, Lipinski & Boykin, 1978）である。これらの記録装置は、指導者が準備をしているため、セルフ・モニタリング行動の般化を狙うには参加者にかかる負担が高いと考えられる。同様の指摘として、Fantuzzo & Polite (1990) や Briesch & Chafouleas (2009) はセルフ・モニタリングを含む自己管理技法のコンポーネント（標的行動の決定や目標の設定など）を整理し、先行研究では自己管理技法の大部分の要素を指導者が担っているため、行動としての自己管理の般化が未検討であることを指摘した。よって、セルフ・モニタリング行動の般化を促進する際には、参加者の既存の行動レパートリーをセルフ・モニタリング行動として選定することが重要であると考えられる。

そのため、本研究ではセルフ・モニタリングを介入技術としてではなく、指導対象となる行動として捉え、セルフ・モニタリングの行動調整機能を他の行動に般化させるための介入技術を開発する。なお、般化のための反応負荷を考慮して、セルフ・モニタリングを記録装置によって媒介された行為ではなく、自身の行動に対する言語行動として定義する。本研究では、セルフ・モニタリング行動の般化を促進するために、単一の行動ではなく複数の行動を指導対象とする複数範例による指導（e. g.,

Luciano, Yvonne Barnes-Holmes, Dermot Barnes-Holmes, 2002), 日常生活場面で行動に随伴する自然な強化随伴性 (e. g., Kohler & Greenwood, 1986), 弁別不能な随伴性 (e. g., Baer, Williams, Osens, & Stokes, 1984) を用いる。

方 法

参加者 行動の自己調整に困難を示す自閉症スペクトラム障害児 3 名 (小学生) とする (参加者間多層ベースラインデザインを用いる)。なお、言語的に自身の行動を報告することを求めるため、(1) ウェクスラー式知能検査の言語理解指標において 70 以上を示し、(2) 直前に遂行した行動を報告できることを基準とする。さらに、行動の実行上の主訴に対応するため、(3) モニタリング対象となる標的行動を言語的に叙述できることも基準とする。

倫理的配慮 研究開始前に、保護者に対して①本研究の目的と手続き、②本研究の成果の発表、③本研究の途中辞退の許可について書面および口頭にて説明を行ない、同意書を得る。

場面 1 回 50 分間の個別指導を原則として週 1 回、A 大学内のプレイルームにて研究実施者および研究協力者数名が実施する。個別指導中に、指導場面および般化場面を設定する。

標的行動 本研究では、セルフ・モニタリング行動と被セルフ・モニタリング行動を標的行動とする。被セルフ・モニタリング行動はセルフ・モニタリングの対象となる行動 (課題従事行動など) であり、セルフ・モニタリング行動とは課題実施中の自身の行動の生起・非生起に関する言語反応とする。

手続き (1) ベースライン期: 参加児が自然な状況下で課題 (指導場面および般化場面) を遂行する。研究実施者は参加者の課題遂行に対して手がかりやフィードバックを提示しない。(2) 介入期: 研究実施者は課題従事行動および課題正確性に関して参加者が弁別できるような言語的手がかりを提示する。そして、セルフ・モニタリング行動と被セルフ・モニタリング行動の一致に対して強化子を提示する。なお、セルフ・モニタリング行動の般化を促進するために、複数の行動を対象とする。また、指導終了後も維持されるように、自然な強化随伴性を準備する。さらに、弁別不可能な随伴性を用意し、セルフ・モニタリング行動のみに強化子を提示する日とセルフ・モニタリング行動と被セルフ・モニタリング行動の一致に強化子を提示する日を混在する。

分析方法 指導場面および般化場面をビデオカメラにて録画し、間接的行動観察を行う。そして般化場面における標的行動の生起を主たるデータとして分析する。分析方法は、参加者間多層ベースラインデザインを用いる。

信頼性の検証 第 1 観察者 (研究実施者) と第 2 観察者 (行動観察法を学んだ大学院生) が独立して観察を行い、観察者間一致率を検討する。

現在の進捗状況と今後の計画

現在は、1 名の参加児に対して予備観察を行っている。予備観察の目的は、指導場面および般化場

面の課題の内容の決定，参加児の課題遂行中のセルフ・モニタリング行動のベースライン水準の評価である。12 月中に予備観察を終え，1 月から介入を導入する。これと並行して，新規参加児の募集を継続して行い，予備観察，ベースライン水準の評価を順次実施する。

引用文献

- Baer, R. A., Williams, J. A., Osens, P. G., & Stokes, T. F. (1984). Delayed reinforcement as an indiscriminable contingency in verbal / nonverbal correspondence training. *Journal of Applied Behavior Analysis*, **17**, 429-440.
- Briesch, A. M., & Chafouleas, S. M. (2009). Review and analysis of literature on self-management interventions to promote appropriate classroom behaviors (1988–2008). *School Psychology Quarterly*, **24**, 106-118.
- Fantuzzo, J. W., & Polite, K. (1990). School-based, behavioral self-management: A review and analysis. *School Psychology Quarterly*, **5**, 180-198.
- Hume, K., Loftin, R., & Lantz, J. (2009). Increasing independence in autism spectrum disorders: A review of three focused interventions. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **39**, 1329-1338.
- Kohler, F. W., & Greenwood, C. R. (1986). Toward a technology of generalization: The identification of natural contingencies of reinforcement. *The Behavior Analyst*, **9**, 19-26.
- Nelson, R. O., & Hayes, S. C. (1981). Theoretical explanations for reactivity in self-monitoring. *Behavior Modification*, **5**, 3-14.
- Nelson, R. O., Lipinski, D. P., & Boykin, R. A. (1978). The effects of self-recorders' training and the obtrusiveness of the self-recording device on the accuracy and reactivity of self-monitoring. *Behavior Therapy*, **9**, 200-208.
- Odom, S. L., Brown, W. H., Frey, T., Karasu, N., Smith-Canter, L. L., & Strain, P. S. (2003). Evidence-based practices for young children with autism: Contributions for single-subject design research. *Focus on Autism and Other Developmental Disabilities*, **18**, 166-175.
- 太田 研 (2010). 発達障害児の書字反応の正確性に及ぼす自己記録の効果 行動分析学研究, **24 (2)**, 17-29.
- 太田 研 (2012). 広汎性発達障害児の書字反応の変容に及ぼす自己記録パッケージの効果 行動療法研究, **38 (2)**, 131-141.
- Stokes, T. F. & Baer, D. M. (1977). An implicit technology of generalization. *Journal of Applied Behavior Analysis*, **10**, 349-367.